

2月号の主な記事: 芸術監督はこう選ぶ3

好評連載の3回目は舞台をアメリカに移し、マギー・フォイヤーが複数のバレエ団監督に採用のポイントについて取材しました。要約版を日本語訳でお伝えします。

アメリカでの取材を通じて感じたのは、芸術監督たちは他国と同類の問題に悩みつつも、「自分の」カンパニーであるという一体感や誇りをより強く抱いているということだ。オレゴン・バレエ・シアターのクリストファー・ストウェルは、「職を得

ようと血眼(ちまなこ)なだけのダンサーは不要です。うちに興味を持って、一緒に仕事をしたいという人が欲しい」と主張する。ボストン・バレエのミッコ・ニッシネンも同様で、タルサ・バレエのマルチェロ・アンゲリーニも「団にとって最適な人材発掘のために最善を尽くすのが、私の哲学」と口を揃える。

健全経営を維持することで、芸術監督が誇りを持つだけでなく団との絆が緊密になるという、ヨーロッパで広まりつつある傾向は、アメリカではすでに顕著だ。入団志望者の水準の高さも誇りの一因で、ヒューストン・バレエのスタントン・ウェルチは、「門戸は常に広く開いていますが、うちを受けにくるのは

すでにプロとして活躍しているレベルの高い人たち」と熱っぽく語る。この年はオーディションを行わなかったのも、すでに人材が揃っているのに加え、付属のバレエ学校からもレベルの高い生徒たちが送り出されてくるからだ。

応募者数に目を転じると、レオナルドとキアラのアイコン夫妻が主宰するアイコン・バレエ・シアターのように、サマーコース、ワークショップも含めて二千名以上を審査するところもある。タルサ・バレエも千名以上のダンサーに会うが、経費を節約し、またネットワークを広げるために、世界中どこであろうと芸術監督のアンゲリーニ一人が出向き、自ら同じ内容で指導し、クラスを録画する。そしてタルサに戻り、二人のバレエ・ミストレスの意見も参考に最終決定を下す。独特なのはウェルチで、最終候補者にはインプロヴィゼーションを課している。「その人の本質がすぐに見えてくるから」だが、ヒューストンが振付家主導のバレエ団である以上、振付家たちとのパートナーシップを築け、委縮することなく即座に創造に入れるダンサーが欲しいのだという。

「その応募者が団に合うかどうかを見抜くには、今いる団員達に混じってどう見えるかをチェックするしかない」というニッシネンの指摘も重要だ。ストウェルは、最初の段階で特に

目立ったダンサーだけでなく二番手グループも、本拠地ポートランドでのカンパニー・クラスに呼ぶという。両団とも旅費は自己負担だが、ニッシネンによれば、それが「ダンサーの本気度を測り、ダンサー自身にも自分の人生を変えかねない決定を下す前に、真剣に職場環境をチェックする気にさせる効果もある」からだという。

ダンサーとして求められる資質は、アメリカでもヨーロッパでも大きな違いはない。どこでもオーディションはクラスから始め、少なくともセンターまでは全員に受けさせる。古典ベースのカンパニーなら容姿の美しさも重要だが、絶対的な尺度が存在するわけではない。「身長が条件に合わなくても、凄く巧ければ採用」だし(ニッシネン)、「男性は筋肉隆々でも、女性は曲線美でもOK。つまようじみたいな体型である必要はない」(アンゲリーニ)。だが一方では、心を痛めつつも「うちには」合わない逸材を不採用にするウェルチのような例もある。

またアンゲリーニのいうところの「楽にできる範囲を超えて」伸びようとするダンサーはまれなもの、事実だ。彼が自らオーディション・クラスを教えることにこだわるのは、指示への対応を見るためでもある。助言を受け入れたがらないダンサーと一緒に仕事をしにくく、群舞の中でも孤立しがちだ。逆に才能がありそうなら、技術的な限界を超えた要求を出してギリギリの状況への反応を確かめる。加えてウェルチは、新しい素材を習得する速さも重視する。

もうひとつ心に留めておきたいのが、ヴィザの問題だ。アメリカの制度は諸外国で信じられているほど不親切なものではなく、そのために応募に二の足を踏む必要はなく(キアラ・アイコン)、研修生用のヴィザは比較的取得も容易だ。給与支払いを受ける正団員用の就労ヴィザは発給に時間も費用もかかるが、才能あるダンサーのためならどの監督も労を惜しまない。

オーディションの心得として、ニッシネンは自然体でいるようにという。「団員たちにも、ありのままにいられるくらい強い人間であってほしいと話しています。クラスで見るのは踊りですが、あなたらしい抑揚と熱意をそこに吹き込んでください。」アイコンやストウェルも、自然な表現や全身の調和と流れ、そして音楽性を重視する。踊りがいいのあるレパートリーや平均よりも長い契約期間を含む優良な雇用条件等、ダンサーに多くを提供できると自負するカンパニーであればあるほど、バーでだけ光る、あるいは「肩書を並べて要求を突き付ける」タイプのダンサーは必要としていないのだ。ニッシネンは、プロ意識こそが「景気の波を問わない、ダンサーの保険」だという。そしてアンゲリーニの次の言葉は、本稿の結びとしてじつにふさわしいものというべきだろう。「要するに、踊れるダンサーが欲しいんです。」(訳:長野由紀)



マルチェロ・アンゲリーニ Photo: Tulsa Ballet